



TITLE:

第8回京都大学医療技術短期大学部 健康科学集談会抄録 1. 産後1年ま での育児評価の変化とそれに影響 する因子

AUTHOR(S):

堀内, 寛子; 我部山, キヨ子

CITATION:

堀内, 寛子 ...[et al]. 第8回京都大学医療技術短期大学部健康科学集談会抄録 1. 産後1年までの育児評価の変化とそれに影響する因子. 京都大学医療技術短期大学部紀要 1998, 18: 73-73

ISSUE DATE:

1998

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49703>

RIGHT:

第8回京都大学医療技術短期大学部 健康科学集談会抄録

日時：平成9年12月25日（木）

13:00～16:30

場所：京都大学医療技術短期大学部 第2大講義室

1. 産後1年までの育児評価の変化とそれに影響する因子

堀内寛子，我部山キヨ子
（専攻科助産学特別専攻）

育児は母親にとって重要な発達課題である。そこで、我々は京都及び大阪府下の4病院で1993年6～9月に出産し、広義の産褥期1年を体験した褥婦446人を対象に、育児の大変さの評価の変化、及びそれに影響する因子を明らかにする目的で出産直後、5日後、1ヶ月後、1年以降の4時期に自己記入式質問紙法及びカルテによる読みとり調査を行った。分析は単純集計、育児の大変さの評価を3群に分類し、周産期要因、育児背景とクロス集計し、Fisherの直接確率検定を行った。夫婦関係、性役割志向性、自尊感情得点との関係はT検定を行った。

初・経産婦ともに育児の大変さの開始は1ヶ月が最も多く、4ヶ月で約半数の者が大変な時期を終了していた。育児の大変さの持続期間は初産婦3.8ヶ月、経産婦4.4ヶ月であったが、経産婦の1割は1年以降も持続していた。過半数が育児に慣れた時期（栄養法別）は、初産婦では混合群が最も早く5ヶ月、ミルク群と母乳群は7ヶ月であった。経産婦では栄養法が異なっても3群ともに4ヶ月で過半数が育児に慣れていた。育児の大変さを出産と同程度とした者は初・経産婦ともに分娩直後から1ヶ月までは7～9割であったが、1年以降は育児は出産以上に大変とした者が初産婦では5割、経産婦では7割に達した。「育児は出産より大変」という

評価に関連する因子は初産婦では「子育ての心配あり」「実母の育児参加あり」、また「自尊感情低値」の者が有意に多かった。経産婦では「育児は出産より大変」という評価に関連する因子は「出産直後、5日後、1ヶ月後に育児の大変さは出産と同程度と評価したもの」「実母と同居あり」の者が有意に多かった。

今回の結果より、経産婦の子育ての大変さは初産婦より長期にわたり、育児技術の習得が育児評価に直接関連しないことから、経産婦の抱える複雑な家族システムの影響や、実母からの良好でないサポートは逆に育児を負担にさせることが示唆された。個別性を重視し、長期的な視野で、家族を含めた援助が必要である。

2. 本学看護学生の入学動機と学習に関する意識調査

奥田 弘恵，亀山美智子
（看護学科）

近年、看護志向性の低い学生の増加と学校への不適応が指摘されており、学校適応に関連する要因を明らかにすることは、今後の指導・援助を考える上で重要である。今回、進路選択時の看護志望順位と適応の関連性を明らかにする目的で、質問紙調査を行った。分析には χ^2 検定とFisherの直接確率検定、t検定を用いた。

対象は1997年度看護学科1回生79名のうち、回答が得られた76名（回収率96%）とした。進路選択時、看護を第1志望としていた学生（以下A群）は52名（68.4%）、第2志望以下とし